

有対自動詞可能構文における意味的組成関係¹

一 他動詞有標可能構文との比較において 一

楠本 徹也

【キーワード】 有対自動詞、無標可能表現、意味機能、構文解析、関係性

1. はじめに

本稿は、日本語における無標識の可能構文（以下「無標可能構文」）のうち有対自動詞による可能構文を取り上げ、その成立要因を文の構成要素における意味機能とそれらの関係性から考察し、体系図による可視化を試みながら、対応する他動詞有標可能構文との違いを明らかにすることを目的とする。

分析対象として、以下のように、日本語教育現場において日本語学習者に特徴的に見られる、自動詞と対応する他動詞の可能形を文脈上不適切に使ってしまう例（楠本2009: 66-68）を取り上げる（（ ）内は正しい用法）。

- (1) a. いくら押しても、ドアが開けられない。(←開かない)
- b. もう少し詰めれば、まだ入れられる。(←入る)
- c. 肩が痛くて、腕が上げられない。(←上がらない)

上記の例は構文的には誤りではない。しかし、文脈や場面により（ ）内の自動詞を使うほうがよい場合があり、そこにおいて他動詞の可能形を使うことで語用上の不自然さが表れる。本稿では、自動詞およびそれと対応する他動詞の可能形それぞれにおいて意味的整合をなす可能表現の特徴を対照分析する。

なお、もう一つ特徴的なものとして、無標であるべき動詞にレル・ラレルの接辞をつけて可能形にしてしまう誤用が見られる（楠本 *Ibid.*）。例えば、以下のようなものがある。

¹ 本稿は楠本(2009, 2010, 2011)における考察や分析を細部修正・整理し、最終論考に至ったものである。

- (2) a. 新聞は辞書を引けばほとんど*分かれる。
- b. どんなに長く住んでいても、この生活には*慣れられない。
- c. 一生懸命勉強すれば、試験に*受かれる。

(2a) (2b) では動詞に自動詞・他動詞の有対性がなく、また (2c) においては「受かる」は「合格する」の意味で「受ける」とは意味が異なるので有対性があるとは言えない。これらのような可能構文は本研究の対象としない。

分析方法としては、まず、文を動作主、動作主の意図、働きかけなどのように意味的要素に分け、その関係性を体系図²として表す。それにより、自動詞とそれに対応する他動詞の可能構文における違いを見てみる。

状態変化を表す無意志自動詞が形態的に無標で可能を表すことについては、既に多くの先行研究がある(石川 1991、乾 1991、小林 1996、青木 1997、長友 1997、張 1998、龐 1999、都築 2001、大崎 2005、姚 2006、呂 2007、楠本 2009 など)が、共通して見られるのは動詞の意味範疇と動作主の意志による制御性から無標可能構文としての特性を探っていることである。本研究では新たな視点として、無標可能構文の意味的な組成要素に注目し、それらの関連性から無標可能構文の概念的特性を探っていく、有標可能構文との対照を試みる。

2. 有対自動詞可能構文における意味組成

2.1. 有対自動詞可能構文の特性

有対自動詞による可能構文は、自動詞としての特性と可能表現としての特性を併せ持つものである。自動詞としては、変化を表す自動詞が用いられることから意味特性として結果性を有する。可能表現としては、動作主の意図・期待する事態の実現性およびそれに向けての働きかけが意味特性として認められる。このことより、有対自動詞による可能構文は動作主の意図・期待が動機付けとなる働きかけのもとで、その成否が、介在する要因または条件により結果として表れた状態であると考えられる。これら一つ一つの意味的要素は文の統語的な構成のためだけに存在するのではなく、相互に関係し合い可能の意味を表出しているのである。そうであるならば、その関係性に注目することで、構文的特性が明らかにな

² 「〈コト内部の可能〉の意志性動作三要素の関係図」として体系的な図示が張 (1998: 78 & 295) に見られる。本研究の参考とした。

るのではないだろうか。ここに構文解析による組成的関係を調べる意味が見出せる。

2. 2. 有対自動詞可能構文を構成する意味的要素

2. 1 で述べたことより、有対自動詞可能構文において以下の意味的構成要素を認める。

(3) 有対自動詞可能構文における意味的構成要素

- ①行為の動作主：Agent (A)
- ②動作主の意図・期待による動機：Motive (M)
- ③動作主の意図・期待の実現への働きかけ：Influential Move (IM)
- ④結果状態成立の要因：Causal Factor of Realization (CF)
- ⑤結果状態(述部)：Resultant Situation (RS)
- ⑥結果状態の主体：Subject (S)

上記の意味的構成要素は、自動詞における結果性と可能表現における事態実現への働きかけを具現化したものである。これらの要素により構文解析を行い、各要素間における関係性を見てもとめることで有対自動詞可能構文と他動詞有標可能構文の違いを探っていく。

2. 3. 有対自動詞可能構文の解析

以下、有対自動詞可能構文を意味的構成要素〈 〉で表す。《 》は文には表れていないが、文脈上存在するであろうもので解析してみる。また、動作主 (A) と結果状態の主体 (S) が有性主体となる場合、便宜上これを《私》とする。

(4) a. いくら押しても、ドアが開かない。

《私》《ドアを開ける》〈ドアを押す〉《鍵がかかっている》〈ドア〉〈開かない〉
A M IM CF S RS

b. 大きすぎて、この箱には入らない。

《私》《入れる》《押し込む》〈大きすぎる〉《物》〈箱に入らない〉
A M IM CF S RS

c. 肩が痛くて、腕が上がらない。

《私》《腕を上げる》《腕を上げる》《肩が痛い》《私の腕》《上がらない》

A M IM CF S RS

d. この薬を飲むと、風邪が1日で治る。

《私》《風邪を治す》《薬を飲む》《この薬がよく効く》《風邪》《1日で治る》

A M IM CF S RS

まず注目すべきことは、結果状態の主体 (S) と結果状態に至る要因 (CF) との関係である。(4a)においては「ドアが開かない」原因は、例えば「鍵がかかっている」というようにドア自体の様態によるものであることが考えられる。(4b)では「大きすぎる」というように「物」の形状が原因で「箱に入らない」結果状態となっている。(4c)では、肩と腕はそれぞれ違う部分ではあるが連続する体の部位であるので一体性が認められるとして、「上腕部」がどういう状態にあるかが「腕が上がらない」原因となっている。(4d)においても、薬の効用 (CF) により風邪が治るということは「この薬がよく効く風邪」であることから、風邪 (S) と薬の効用 (CF) との関係性が認められる。

以上のことより、有対自動詞可能構文においては結果状態の主体がどういう状態であるかが結果状態自体を引き起こす要因となっていると考えられる。つまり、結果状態の主体 (S) の様態が結果状態の起因 (CF) となっているのである。このように、S と CF において関係性が認められる。

3. 他動詞有標可能構文との対照

2. 3で見られた結果状態の主体 (S) と結果状態の起因 (CF) における関係性が、他動詞有標可能構文にも見られるだろうか。以下、検証してみる。例として「開ける」「入れる」「上げる」「治す」を使った可能構文を取り上げる。

(5) a. 両手がふさがっているので / 今会議中なので、ドアが開けられない。³

《私》《ドアを開ける》《手が使えない / 入室不可》《ドア》《開けられない》

A M CF S⁴ RS

³ 「ドアが開かない」と「ドアが開けられない」の違いは、語用の面より石川 (1991:67-73) も同じく指摘している。

⁴ 結果状態を表す述部における「ドア」「物」「手」は動作の対象 (Object) とも考えられるが、「何がどうである」という構文における主体認知がなされるゆえ、主体 (S) とする。

b. 壊れ物だから、スーツケースには入れられない。

《私》《スーツケースに入れる》《運搬中壊れる / 規則で禁止》《壊れ物》《入れられない》

A M CF S RS

c. ワキガが気になって、吊革を持ちたくても手が上げられない。⁵

《私》《手を上げる》《ワキガが気になる》《手》《上げられない》

A M CF S RS

d. あの医者とはどんな病気でも治せる。

《医者》《病気を治す》《名医である》《あらゆる病気》《治せる》

A M CF S RS

(5a)～(5d)の述部においてそれぞれ「開かない」「入らない」「上がらない」「治る」といった自動詞は使えない。ここで注目すべきことは、動作主(A)と結果状態成立の要因(CF)との関係性である。例えば(5a)の場合、両手いっぱい荷物を持っていたり腕を怪我していたりして手が使えない、または会議中だったり規則で入室禁止であったりしてドアを開けることができない⁶などで、動作主自身や動作主を取り巻く状況が「ドアが開けられない」原因となっている。即ち、動作主(A)と結果状態成立の要因(CF)との間に関係性が存在するのである。このことは(5b)(5c)(5d)にも当てはまる。(5b)においては、結果状態成立の要因は「(私が)運搬すると壊れる」「壊れ物を入れてはいけない規則がある」など、動作主の行動や動作主をとりまく外的要因となり、動作主(A)と結果状態成立の要因(CF)に関係性が認められる。なお、構文中の「壊れ物だから」にひきずられて「スーツケースに入れられない」原因は「壊れ物だから」と考えがちであるが、もう一步考察を深化させると、なぜ「壊れ物だから」「スーツケースに入れられない」のかという理由付けが必要である。即ち、「壊れ物だから」「～ので」「スーツケースに入れられない」の「～ので」の部分がCFとなるのである。(5c)も同様に、動作主が「ワキガが気になる」ので「手が上げられない」となり、動作主の様態が結果状態の原因となっている。(5d)においては、医者(A)は名医である(CF)ことから、動作主(A)と結果状態成立の要因(CF)に同一性が認められる。

⁵ 例文は〈<http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20110704-00000302-shueishaz-ent>〉(2011年9月某日閲覧、現在閲覧不可)を参考とした。

⁶ 前の方は内因可能、後の方は外因可能と呼ばれるものである。

4. おわりに

結果状態の要因 (CF) が主体 (S) の状態に帰するか動作主 (A) の状態に帰するかによって、自動詞無標可能構文と他動詞有標可能構文が弁別されることを論証してきた。日本語教育においては、可能状態が動作の向かう対象の状態が原因ならば自動詞を、動作主自身または動作主をとりまく状況が原因ならば他動詞可能形を使って表すと簡素化して教えれば、学習者の誤用回避に役立つのではないかと思える。

しかしながら、実際の「生きた日本語」では、このような区別が必ずしも構文上明確になっているとは限らず、例えば「大きすぎて、入れられない」「肩が痛くて、腕を上げられない」というような可能構文も日本語として違和感なく受け入れられる。この場合、述部の他動詞の存在により動作主に視点があたるといった文脈の支持が必要となるだろう。どのような文脈的要因が働いているかによって、構文的变化が生じる可能性は排除できない。そのような場合においても、結果状態の原因において主体または動作主との関係性が存在し、それが意味解釈の基本的枠組みとなるであろうと考える。そういったプロトタイプの視点の形成に本研究は供することができたのではないだろうか。

参考文献

- 青木ひろみ (1997) 「自動詞における《可能》の表現形式と意味—コントロールの概念と主体の意志性—」『日本語教育 93』、pp.97-107
- 石川守 (1991) 「自動詞と他動詞の用法について—「人の視点」と「物の視点」に関して—」『語学研究 64』、拓殖大学語学研究所 pp.35-80
- 乾とね (1991) 「潜在的比較の表す可能の意義について—無意志主体可能動詞の可能の意義—」『上智大学国文学論集 24』、pp.155-174
- 大崎志保 (2005) 「日本語の自動詞による可能表現—動詞制約を中心に—」『日本語文法 5-1』、pp.196-211
- 楠本徹也 (2009) 「無標可能表現に関する一考察」『東京外国語大学論集 79号』、pp.65-85
- (2010) 「無標可能表現における被動性と再帰性」2010 世界日語教育大会口頭発表、国立政治大学、台湾
- (2011) 「有対自動詞可能表現における概念的的特性—他動詞有標可能表現との比較において—」中国人民大学東アジア日本言語文学文化国際シンポジウム「有

- 対自動詞による可能表現の研究」(ラウンドテーブル)口頭発表、北京、中国
- 小林典子(1996)「相対自動詞による結果・状態の表現—日本語学習者の習得状況—」『文藝言語研究・言語篇 29』、筑波大学 pp.41-55
- 張威(1998)『結果可能表現の研究—日本語・中国語対照研究の立場から』、くろしお出版
- 長友文字(1997)「可能形における自動詞と他動詞—日本語教育から見た可能表現の研究(二)—」『和歌山大学教育学部紀要 47』、pp.9-16
- 都築順子(2001)「『可能の意味を含む自動詞』に関する一考察」『2001年度日本語教育学会春季大会予稿集』、日本語教育学会 pp.85-90
- 龐黔林(1999)「日中両国語の可能表現について—自動詞の可能表現を中心に—」『神戸女学院大学論集 45-3』、神戸女学院大学研究所 pp.47-59
- 姚艷玲(2006)「有対自動詞による無標可能文の成立条件—〈可能〉の意味合成のメカニズム—」『日本語教育 128』、pp.90-99
- 呂雷寧(2007)「可能という観点から見た日本語の無意志自動詞」『言語と文化 8』、名古屋大学 pp.187-200

An Analysis of Constituent Elements of Potential Sentences, Comparing the Case of Using Intransitive Verbs with That of Using Transitive Verbs Paralleled to Them

KUSUMOTO Tetsuya

This paper analyzes constituent elements of potential sentences which include intransitive verbs marked by no conjugated form of potentiality (hereafter referred to as “unmarked intransitive potential sentence”) in comparison to those of potential sentences which include transitive verbs conjugated as potential form (hereafter “marked transitive potential sentence”). A sentence is analyzed as the following constituent elements: Agent (A); Motive (M); Influential Move (IM); Causal Factor of Realization (CF); Predicate of Resultant Situation (RS); Subject of Resultant Situation (S). Focus is placed on the relationship between these elements. As a result, in unmarked intransitive potential sentences, S is closely connected with CF in that CF reflects the S’s property. On the other hand, in marked transitive potential sentences there is a close connection between A and CF in which CF reflects A’s condition. For example, an unmarked intransitive potential sentence “*Doa ga akanai.* (The door wouldn’t open.)” implies that RS (not open) is realized by S (the door)’s situation (i.e., it is locked), while in a marked transitive potential sentence “*Doa ga akerarenai.* (I can’t open the door.)” RS (not open) is realized by A (a doer; i.e., I)’s situation (i.e., I can’t use hands; it is prohibited to enter the room). Thus, choice of an unmarked intransitive verb or marked transitive one in a potential sentence depends on whether CF belongs to S or A, the former constitutes the unmarked intransitive potential and the latter the marked transitive one.

